

# ラオス人民民主共和国での看護交流

古川 智恵

姫路大学 看護学部

## 1. ラオス人民民主共和国の概要

ラオス人民民主共和国 (Lao People's Democratic Republic 以下、ラオス) という国をご存じでしょうか。ラオスは、東南アジア内陸に位置する多民族・社会主義国家で、1953年にフランスから独立したあと内戦を繰り返し、長期にわたって政治的・軍事的に不安定な時期が続いていました。そのため、優秀な人材の国外流出が続き、経済発展が遅れたため、現在も開発途上国に位置づけられています。



図1 ラオスの位置<sup>1)</sup>

ラオスの首都であるビエンチャンの観光名所として街中を歩いているとどこからでも見ることができるパトゥーサイ (凱旋門) (写真1) があります。パトゥーサイは、ラオス内戦犠牲者の慰霊碑でもあり、パリの凱旋門を参考に建てられた建造物で、ラオス語で“勝利の門”を意味していま

す。門の中の天井には繊細なレリーフが施されていて重厚感のある歴史を感じることができます。また、ワット・シーサケットは、ビエンチャン最古の仏教寺院で、大小様々な仏像が数多くあり、仏像の表情などを見ていると時間を忘れて見入ってしまいます。最大のおすすめは、メコン川沿いのナイトマーケットです。暮らしの中で先祖代々受け継がれてきた織物や編み物といった伝統工芸品を扱う店が多くとても魅力的です。その中でもお土産に最適のTシャツは速乾性に優れ、肌触りもよく毎回大量に購入してしまいます。その他にもたくさんの観光名所がある大変すばらしい都市です。



写真1 パトゥーサイ (凱旋門)

## 2. ビエンチャンの医療事情

ビエンチャンは、インフラがまだまだ未整備のところが多いのですが、車の所有者が増えるにつれ、交通事故が増加し、急性疾患などと合わせて

救急医療のニーズが増加しています<sup>2)</sup>。私が病院や街中で見た救急車はトヨタのハイエースを改良したもの(写真2)で、サイレンこそ鳴らして搬送していましたが、車内は特別の医療機器は備えていませんでした。そのため、病院に搬送するまで治療が開始できず、看護の課題があると思いました。それでも、COVID-19が世界中で猛威を振るって、渡航できなかった3年前と比較して、救急車が活躍している回数は増えていることに驚きました。



写真2 救急搬送の様子

マホソット病院は、ラオスの中核を担う国立病院で、2021年に中国の支援を受けて新しい8階建ての入院病棟が建設され、稼働していました(写真3)。8階にはVIP病棟を兼ね備えており、ビエンチャンを一望できる景色が素晴らしかったです(写真4)。



写真3 Mahosot Hospital 新病院

### 3. ラオス人看護師との看護交流

サバイディー (ສະບາຍດີ). 日本語で「こんにちは」の意味です。国民の約70%が熱心な仏教徒であるラオス人は、誰かと出会うと両手を合わせてサバイディーと挨拶します。私も、元気よくサバイディーと挨拶し、久しぶりの看護部のドアを開けてカウンターパートの副看護部長さんとの再会を喜びました。スーツケースいっぱいに詰め込んだストーマケア用品やお土産を中央のテーブルに広げて、しばしの談笑に胸が高鳴りました。

現在、私は、この施設で4つの調査を通して看護支援を実施しています。1つ目は開腹手術を受けた患者のSurgical Site Infectionに関すること、2つ目は周術期ケアに関わる看護師の実践能力に関すること、3つ目はストーマ造設患者のQuality of Lifeに関すること、そして、4つ目は外来通院する2型糖尿病患者のHealth Belief Modelに関することです。

3つ目のストーマケアについては、カウンターパートの副看護部長さんとともに病棟を訪問し、担当看護師も合流して入院患者さんを訪問します。病室では、ストーマの状態を病棟看護師とともにアセスメントし、今回持参したストーマケア用品や病院にある医療材料を用いてケア方法を検討します。ラオスでは、医療器材の流通が整備さ

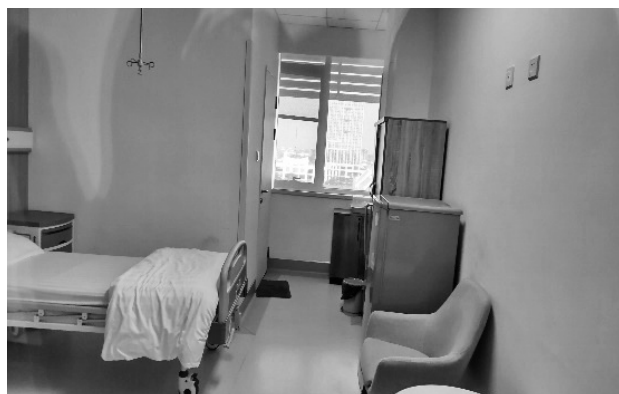


写真4 VIP病室

れていないため、日本と同じような潤沢な医療材料やストーマケア用品はありません。限られた環境の中でどのようにケアするとよいかを一緒に考えることは、看護師さんがどのようにストーマケアを考えているかを知ることができる大変良い機会です。お互いに、意見交換をしながらケアを進めていきます。ストーマケアを実施するときにも思うのは、ラオスの看護師さんは、日本人のように時間に追われてケアしているわけではありません。イレオストミーで排泄物の漏れがあり、皮膚障害で苦痛を訴えている患者さんを前にし、私は「大変だ。早くケアをしてあげなくちゃ」と焦ってしまいますが、ラオス人看護師は「どこから来たの～、へ～」と雑談も多く、ケアの途中であってもスマホでラインをしたり、私用の電話に出たりと自由な感じですが、患者さんも怒ることもなく「〇〇からだよ～」と談笑に加わります。私はこういう時に、これは国民性もあるとは思いますが、大きな包容力で患者さんを安心させているトラベルビーの「人間対人間の看護」<sup>3)</sup> だな～、と思います。このような、民族性というか、社会性というか、慣習というか、はとても大事だと思います。日本から遠く離れた異国の異文化の中で、看護を通して交流する場合には尊重されるべきものだと思います。

#### 4. おわりに

日本からベトナムのホーチミン、カンボジアのプノンペンを経由してラオスのビエンチャンまで飛行機で8時間以上。遠く離れた異国で見つけた友人たちと今はラインで簡単に繋がるができます。しかしながら、実際の医療や看護の現場は、直接見て・診て・看てしなければ、本当の看護交流は難しいのではないかと思います。

「お互いが定年になるまで頑張ろう」と約束した友人と今後も交流を深めていきたいと思います。

利益相反は存在しない。

#### 引用・参考文献

- 1) 外務省：ラオス人民民主共和国. <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/laos/index.html> (2022, 12, 5 閲覧)
- 2) ビエンチャン、ミタパープ病院の救急救命医療体制強化を支援. <https://www2.deloitte.com/jp/ja/blog/csr/2019/vientiane-helps-mitapap-hospital-strengthen-emergency-medical-care.html> (2022, 12, 5 閲覧)
- 3) Joyce Travelbee (著) / 長谷川浩・藤枝知子 (訳) : トラベルビー人間対人間の看護. 医学書院. 東京. 1974.